

大邱中学校について：在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉， 継雄

九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座：比較教育文化論

<https://doi.org/10.15017/15663>

出版情報：大学院教育学研究紀要． 10， pp.1-22， 2008-03-31． 九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン：

権利関係：



大邱中学校について

— 在朝鮮「内地人」学校の事例研究 —

稲葉 継雄

はじめに

植民地朝鮮において大邱は、京城・平壤・釜山に次ぐ第4の都市で、慶尚北道の行政・経済の中心地であった。「一九四〇年代の大邱府の人口は一七万人、うち五万人の日本人が街の中心部を占め、一二万人の韓国人が周辺郊外に住んでいた」⁽¹⁾。

その第4の都市大邱にあった大邱中学校は、しかし、在朝鮮「内地人」中学校として4番目にできたのではなかった。京城中（1909年5月）、釜山中（1913年4月）、平壤中（1916年4月）、龍山中・大田中（1918年4月）に続く6番目の中学校だったのである。大邱中は、「大田と聯隊の争奪によつて、中学校の創立と交換条件の犠牲となり大田中学校より遅れて創立せられた」⁽²⁾という。すなわち、大邱には陸軍の連隊が設置されたので、その代わり中学校は、大田に先に設立されたのである。

大邱駐屯の連隊は、1915年12月に設置された第20師団第80連隊であった。ちなみに、軍歌「万葉の桜」の一節に「八十余箇所に屯して……」とあるように、80は、歩兵連隊として「日本で一番、数の多い番号」⁽³⁾であった。

大邱中学校は、創立の経緯からして第80連隊と縁があったばかりでなく、キャンパスも連隊と隣接していた。隣接も隣接、「聯隊とは鉄条網で仕切られ密着しているために同区画に見える」⁽⁴⁾ほどであった。したがって、大邱中学校の教育や学校文化は、80連隊の存在と不可分の関係にあった。本稿の最大の狙いは、戦前日本の軍国主義の中で生成した男子中等教育機関の一典型として大邱中学校の姿を浮き彫りにするところにある。

一. 学校沿革

「大邱中学校」の名が新聞紙上初めて登場するのは、1920（大正9）年2月14日のことである。同日付『京城日報』は、「大邱中学開校」と題して次のように報じている。

大邱中学校は愈々九年度より実現せしむることとなりたるが初年度は校舎其他の都合に依り小学校補習科の名称の下に開校すべしと而して初年度予算は一万五千元とし学級数は一学期五十人とな

すか二学期に百人となすかに付当局は今研究中なるが入学志望者は大邱第一第二の両校にて約八十名なりと云へば其他の志望者を加算すれば定員を増加するを以て選抜試験を行ふに至るべしと

この文中にあるように、当時、大邱尋常高等小学校を第一小学校、大邱尋常小学校を第二小学校と通称していたが、大邱中学校の前身としての補習科は第二小学校（1921年、大邱本町尋常小学校と改称）に置かれることになった。そして、上の記事が出た頃には、「学校建設敷地買収に要する府民の寄附金予定額四万円は略其の額に達したるに依り過般来より敷地買収に取掛か⁽⁵⁾」っていた。

1920年3月下旬、補習科の入学試験が行なわれた。受験者は106名、合格者は93名であった。この93名中のひとりで、後に正式に大邱中学校第1回生となった横松三治は、補習科時代を次のように回想している。

大正九年四月、幸い私は入学試験に合格して本町小学校（第二小学校）内の補習科^(マ)に通いはじめた。一年生は二組で百五人であったように思う。尋常六年から直行が多かったことは当然として、釜山、龍山、京城などに寄宿させるよりは、ということで中学開設を待った親御さんもおられたことであろう。第一小学校の高等一年二年から入った同級生もかなりいた。それに、小学校とちがって金泉、永川、慶州、浦項など遠来の人もいた。⁽⁶⁾

これによってわれわれは、補習科生の年齢にかなりの幅があったこと、すなわち、小学校尋常科からの直行組のみならず高等科1・2年在学生、さらには高等科卒業生までいたこと、生徒の出身地は広域にわたり、「遠来の人」は、1920年当時まだ寄宿舎がなかったので下宿か汽車通学を余儀なくされたこと、を知ることができる。

1920年10月24日、「藤川道知事、松井府尹、学校組合会議員、新聞記者其の他関係者約五十余名参列し」⁽⁷⁾て大邱中学校の地鎮祭が行なわれた。

大邱中学校としての第1回入試は1921年3月24日から26日まで実施された。募集人員は100名、試験科目は国語・算術・国史・地理・理科、ほかに口述試験および身体検査があった。

入学試験は終わったものの、この時点ではまだ大邱中学校の法的裏付けはない。大邱中学校が公式に発足したのは、関係官制が公布された1921年4月19日、開校式が挙行されたのは4月25日である。第二小学校で行なわれたこの開校式に臨んだのは、中学1年の課程を修了した補習科生と、新たに募集された1年生108名であった。つまり大邱中学校は、2年生と1年生各2クラスを以てスタートしたのである。

同年6月、予て工事中であった新校舎の主要部分が竣工、4日、これに移転し、12日、水野政務総監をはじめとする高官・名士の臨席を得て盛大な開校式が行なわれた。以後、6月12日が大邱中学校の開校記念日とされた。

大邱中学校の校歌が何時制定されたのか定かでない。しかし、作詞者である日高宇光教諭が1922年に就任しているので、恐らく1922年度中ではなかったかと思われる。校歌の歌詞は次のとおりで

ある。

- 一. 沃野千里の片ほとり 琵琶の嶺高く背に負いて
そゝり立ちたる我が校舎
文化の光身に浴びて 惰眠を破る雄叫びや
我が大中の健男児
- 二. 学海波は荒くとも 人生崎嶇は多くとも
質実剛健一すじに 至誠の道に進みなば
磨ける玉の徳なりて 君子の国の名にそわん
- 三. 御国の使命双肩に かゝれる身ぞや諸共に
文武の道をいそしみて 自疆五年学ならば
亜細亜に強き魂入る 務を果す人となれ

校歌は、校訓3カ条（至誠一貫：聖勅ヲ奉戴シ実践躬行スヘシ 質実剛健：皇国男子ノ意気ヲ發揚スヘシ 奮励努力：本分ニ邁進シ奉公ノ実ヲ挙クヘシ）と一体であり、この精神を徹底させるため朝礼のたびに歌われた。なお、校章制定の時期も明らかでないが、校歌と違って校章は、生徒の考案によった点が注目される。ある第1回生が、「大中の校章のかたち考へつ 生徒に図案を課せし頃思ふ」という和歌を残している。

1923年、本格的な寄宿舎が完成した。寄宿舎は、1921年中に小規模な1棟が建てられていたが、23年新築の1棟によってほぼ需要に応じられるようになった。通称は、校歌1番の歌詞に因んで「雄叫寮」とされた。

1924年1月、大邱中学校の入試科目が、それまでの国語・算術・歴史・地理・理科から国語・算術の2科目に削減されることになった。小学校における受験準備教育の過熱を考慮した措置であった。

またこの頃、大邱中学校の学級増（1学年2学級から3学級へ）の要求も社会的な高まりを見せていた。しかし、和田校長は、「自分としては未だ左様の相談を受けたる事なく三学級募集等の事に就ては考慮したる事もなく依然二学級を募集する方針なり」^⑧と語っている。

1924年4月は、大邱中学校にとって大きなエポックであった。朝鮮の中等学校において現役陸軍将校を配属しての軍事教練が開始されたのは1926年度のことであるが、大邱中学校では、それより2年も前に学校独自の判断で80連隊所属将校による教練を始めたのである。これについて、1924年6月7日付の『京城日報』は次のように報じている。

大邱中学校にては去四月以来黒江少佐を専任教官として兵式教練を担当せしめて居るが更に最近

歩兵第八十聯隊から数名の将校下士卒の応援を求めて毎週一回宛四五年を合て教練しつゝありと

校内における軍事教練の延長として同年11月からは、3年生以上に80連隊での3日間の兵営生活を体験させるようになった。次の記事は、その準備段階での報道である。

十一月に入つては第三年生以上二百余の健児は十四日から十六日の暁にかけ歩兵第八十聯隊に兵営生活を試むべく同隊将校下士の指揮の下に或は宿営、或は夜営、或は発火演習等、軍事教育の体験を受け堅忍不拔、困苦欠乏の精神を涵養すべく、既に聯隊長の熱心なる歓迎を受けつゝある⁽⁹⁾

同年10月31日、大邱中学校第1回運動会が開催された。同年4月に初めて5学年が揃い、6月には校庭に大トラックが竣成したからである。

1920年の補習科発足から5年を経て、1925（大正14）年3月7日、第1回卒業式が挙行された。1回生の卒業式の思い出は次のとおりである。

大正十四年三月に大邱中学の第一回卒業式（一年の時の百十人は既に四十五人に減っていた）

当日和田校長は卒業生全員に、「巢立ちする雛のゆくえは変るとも、つとめを果たせ誠尽して」と先生の直筆で書かれた扇子を校長より直接手渡しでいただいた。この訓は、後刻社会に出ての座右銘として大いに役立った。⁽¹⁰⁾

官立（朝鮮総督府立）中学校として第1回卒業生を出した直後の1925年4月1日、大邱中学校は慶尚北道に移管された。以後の公式名称は大邱公立中学校である。

1926年、前述したように配属将校による軍事教練制度が朝鮮にも適用された（日本内地は1925年度から）。ある5回生（1924年入学）は、「三年生の時、愈々現役の陸軍将校が配属将校としてやって来ました。林田金城大尉、軍も初めてなので優秀な将校を選んで配属したのでしょうか」⁽¹¹⁾と見ている。

1930年1月、演武場ができた。1月16日付『京城日報』に、「大邱中学校は新築中の演武場が近く落成するので廿五日落成式をかねて武道大会を催す」という記事がある。

同じく1930年2月7日付の『京城日報』は、「南鮮中等学校の雄大邱商業野球部には大邱府としての応援団があるが大邱中学校にはこの後援会がなかつたが今回同校父兄会が中心となりこの後援会を組織し結氷明けをまつて大々的に活躍することになった」と、大邱中学校野球部後援会（応援団）の結成を伝えている。後援会はできたものの、大邱中野球部の戦績が芳しくなかったことは後述するとおりである。

1931年6月、夏休み中の臨海学校（希望者対象）の場所が、従来の慶尚南道馬山から慶尚北道浦項に変更された。理由は、「道内膝下の浦項海水浴場に変更」⁽¹²⁾という以外、不明である。なお、馬山での臨海学校が何年から始まったか（1920・21年に実施されたか）は明らかでないが、1922年に

大邱中学校について

実施されたことは確かである。同年、豊田一良教諭の殉職（水死）事故があったからである。

1931年9月18日、満州事変が勃発、大邱中学校と歩兵第80連隊との恒常的な交流に、出征兵士の歓送迎、事変戦死者の慰霊祭など新たな行事が加わった。

1934年2月、大邱中学校の制服を他校に先駆けて折り襟服とすることが決定された。これを報じた新聞記事は次のとおりである。

帝国被服協会の国民被服統制に順応し大邱中学校では来る四月一日から服装制度を改正し現在の殺風景な黒小倉服を廃し新入学生から○茶色而かもスマートな折襟服になす事に決定し目下見本の作成をなさしめてある、尚同改正服は夏冬の区別をつけず寒暖保温は下着によつて調節せしめるので経済的にも非常によく出来てゐる（○は判読不能）⁽¹³⁾

いわゆる国防色の折り襟服は、時代の波とはいえ、生徒たちには不評だったようである。制服変更4年目の1937年に入学した18回生が、「五年生だけ黒の詰め襟の制服、制帽で国防色の折り襟の四年生以下に比べて大人びて見えた」⁽¹⁴⁾と印象を語っている。

1940年、入学定員の100名（2学級）から150名（3学級）への増員が認められた。大邱地域住民にとって1924年当時からのまさに宿願が叶えられたわけである。

太平洋戦争期に入ると、大邱中学校も御多分に漏れず、というよりも他校以上に、戦時体制に組み込まれた。次の引用は、1942年入学（第23回）生の回顧録の一節である。

大邱中学校に入学後は、各種クラブも柔・剣道・グライダー、乗馬部等が主体となって、戦時体制の強いものになり、教科・学習の時間も勤労奉仕に変更されて、田植え・稲刈り・松の枝採集（松根油）、東村飛行場設営作業、前田鉄工所においての手榴弾作成（旋盤作業）、集団宿泊作業時の炊事当番等々、多くの作業に従事（以下略）⁽¹⁵⁾

1945年3月22日、最後の卒業式が行なわれ、21回生が5年修了で、22回生が4年修了で卒業した。第1回から22回まで卒業生の総数は1,710名である。これを単純に彼らの入学定員総計2,300名（100名×20+150名×2）に比すると74.3%に当たるが、後述するように転入・転出が多かったので、大邱中学校に入学して卒業した者の比率は74%を大きく下回る。

1945年8月15日、大邱中学校は終焉を迎えた。大邱中学校第1回生であり1940年5月からは母校の教員でもあった酒井求馬（求女）は、8月15日の状況を次のように記している。

あの終戦の日、全校生徒と全校職員が玄関前に集合しまして、拡声機から出るラジオの放送を聴きました。この玄関は、大邱中学校の開校の直後の建築工事の始まった時から、私達が手塩にかけて、当番として磨いた玄関です。その玄関を、終戦の時の校長三浦三義人氏と、軍事教官と、私との三人が、奉安殿から、御真影と教育勅語謄本とを奉持して通りました。私が公式に通った最後です。

そして、校長室で、三人立会いで、御真影と教育勅語謄本とを、涙を流しつつ、焼却しました。校長室の応接机の上で、私がマッチを擦って、御真影に点火し、焼き終わってから、勅語謄本に点火しました時には、腕が振るえて、息がつまる気持ちでした。今、回想しましても、すべてが明瞭に浮びます。第一回卒業生であった私という者が、母校の校長室で、御真影と教育勅語の謄本とを焼くとは、普通ならば考えられない事です。⁽¹⁶⁾

二. 教員の去就

1. 校長

大邱中学校初代校長和田英正は、元々は富山の小学校教員であったが、1908年に広島高等師範学校を卒業し中等教員の資格を得た。1912年朝鮮に渡り、京城鍾路尋常高等小学校の校長となった。翌1913年には仁川高等小学校長と仁川高等女学校長事務取扱を兼ね、以後、中学校長として長期勤続することになる。仁川高等女学校長（1914～19年度）・釜山高等女学校長（1919～20年度）を経て、大邱中学校の官制公布（1921年4月19日）とともに初代校長に着任した。

ところで、大邱中学校と同時に元山中学校も開設されたのであるが、元山中学校の初代校長は、前年度まで京城中学校教諭だった西脇豊造で、西脇は、元山中で初めて校長に昇任したのである。和田英正が、大邱に赴任するまでに小学校・高等女学校を通じてすでに9年の校長経験を有したということは、大邱中学校がそれだけ重視されていたということであろう。

大邱在任4年（1921～24年度）で大邱中学校の基礎を固めた和田は、その後朝鮮人教育に転じ、海州高等普通学校長（1925～29年度）・平壤高等普通学校長（1930～31年度）・京城第一高等普通学校長（1932～37年度）・京畿中学校長（1938年度）を歴任した。なお、京城第一高等普通学校と京畿中学校は同一校であり、和田は、年度途中の1938年10月27日付で辞任している。

和田の教員経歴の特徴は、勤務校がバラエティーに富んでいたことである。1935年の時点で、「氏は渡鮮以来既に二十四年、初等教育から青年男女の教育に及び、あらゆる経験を積んだ人である」⁽¹⁷⁾と評されている。

第2代校長高木善人は、1907年東京帝国大学文科史学科を卒業するや直ちに旧韓国に渡り、学部（文部省）編輯局において5年余教科書編纂に従事した。その後京城中学校教諭（1913～18年度）・全州高等普通学校長（1919～24年度）を経て大邱中学校長となったのである。高木は、大邱中学新任校長としての抱負を次のように語っている。

前和田校長は本校の理想として質実剛健の気風を涵養すると云ふ事に周到の注意を払つて居られたので、武道や運動上にも其苦心の跡が歴々として見るべきものがあります尚この後今一息、鍛冶練磨するならば恐らく全鮮に覇を称へる事が出来るだらうと信じます⁽¹⁸⁾

高木は、大邱中学校長（1925年4月～28年5月）の後新義州高等普通学校長と京城第二高等普通

学校長を1年ずつ務め、朝鮮総督府視学官（1930～31年度）を経て再び内地人学校（龍山中学校）の校長に戻った（1932～39年度）。

第3代校長木藤重徳は、1914年に東京高等師範学校を、さらに1921年同校専攻科を卒業した。朝鮮には1922年5月、総督府編修官兼京城師範学校教諭として赴任し、その後、編修官を本務としつつ水原高等農林学校教授・総督府視学官などを兼務した。そして1928年5月、校長経験のないまま大邱中学校長となったのである。

このように木藤重徳の大邱中学校長抜擢は、教育家としてよりも教育行政家としての手腕が買われた節があるが、それは校長辞任に際しても窺われる。すなわち木藤の1930年10月の大邱中学校長辞任は、平安南道視学官就任が優先された結果であったと見られるのである。

木藤は、平安南道視学官に続いて総督府視学官（1932～33年度）となり、1934～40年度は釜山女子高等普通学校～釜山港高等女学校（1938年、釜山女子高等普通学校を校名変更）の校長を務めた。

尾形友助の第4代大邱中学校長就任は、1930年度途中の突然の人事であった。尾形の次女登美も、「昭和五年十一月一日付で突然大邱中学校の校長を命ぜられ、これも校長人事の渦に巻き込まれたようでした」⁽¹⁹⁾と見ている。1932年3月には、大邱の「女子高普校長白神氏、増原農林校長、尾形中学校長はそれぞれ他道へ榮転することに決したらしい」⁽²⁰⁾と報道されたこともあったが、尾形は、結局1944年3月末まで13年5ヵ月勤続した。13年5ヵ月は、大邱中学校の存続期間（1921年4月～45年8月）の55%（補習科時代を含めても53%）に当たり、言うまでもなく歴代校長中の圧倒的「最長不倒距離」である。

尾形友助は、1880年山形県の生まれ、1907年広島高師卒である。この山形出身と広島高師卒は、後述するように大邱中学校長としての尾形にとって大きな意味をもった。

尾形は、1913年、京城中学校教諭として朝鮮に聘された。京城中学校には8年勤め（1913～20年度）、その後京城女子高等普通学校教諭4年（1921～24年度）を経て京城第一高等女学校で校長となった（1925～30年度）。大邱中学校長に就任した1930年11月当時すでに50歳、辞任時は64歳であった。退任と同時（1944年3月30日）に高等官2等すなわち勅任官に叙せられたが、それから僅か1年後（1945年4月17日）に死去した。まさに「大邱・大中で燃え尽きた」⁽²¹⁾と言ってよい。

尾形友助が、当時としては異例中の異例の高齢まで現役校長で居られたのは、山形県人の人脈に負うところが大きい。県人会の有力者として大邱教育界には、いずれも大邱師範学校長であった鳥飼生駒（1934～38年度）と高力得雄（1941～44年度）が居たし、何よりも朝鮮総督（1942年5月～44年7月）の小磯国昭が、尾形と小学校で机を並べた竹馬の友であった。

生徒たちが尾形校長に奉ったニックネームは「カタパン」であった。大邱中学校同窓会誌にカタパンに関するエピソードは数多いが、次に代表的な尾形評を掲げておこう。

朝礼のとき及び修身の時間は固い話ばかり、君に忠、親に孝と退屈な話のみに終始し、上級生は上級生らしくせよ、上級生ぶるな、ぶるな、らしくせよ、というのが得意であった。⁽²²⁾小供心にも、此の様な人ばかり居たら、世の中平和かも知れんが、さぞつまらないだろうなあと心配したものである。⁽²²⁾

歩兵第80連隊と隣合わせの大邱中学校の、しかも満州事変～日中戦争～太平洋戦争と続く時代の校長であっただけに、尾形は、生徒を陸士・海兵など軍関係学校へ送ることに積極的であった。そして卒業生には、自ら毛筆で教訓を認めた色紙を一人ひとりに贈った。1943年3月卒業生への文面は、「軍神の偉勲を偲びつゝ 至誠一貫 皇道宣揚に奮励努力せよ」⁽²³⁾であった。

最後の第5代校長については、今のところその氏名（三浦三義人）と在任期間（1944年4月～45年8月）以外の情報を持ち合わせない。

2. 教諭

大邱中学校の前身として開設された補習科の教員について、1920年4月5日付の『京城日報』は次のように報じている。

本月より開校の大邱中学校補習科教員は過般来道当局に於て人選中なりしが之に要する教員は校長外七名にして中（うち一稲葉註）国語、漢文、数学、英語の四科目は各専任教師を聘し其他は当分大邱高等女学校教員を囑託すべしと前記四科目中国漢文及び数学教員は東京高等師範校卒業生を招聘する事に決し両教員は不日着任の筈なるも英語教員は尚決定し居らずと

「国漢文及び数学教員は東京高等師範校卒業生を招聘する事に決し両教員は不日着任の筈」というこの「両教員」は、豊田一良と亀山利平であろうと思われる。「豊田先生は亀山先生とともに補修科で可愛がって頂いた先生」⁽²⁴⁾という第1回生の証言がその根拠である。しかし、豊田は1918年東京高師地歴科の、亀山は1920年東京高師文科の卒業であり、兩名とも、数学を担当したとは考えにくい。ともあれ、豊田と亀山は、1920年度、大邱尋常小学校訓導として補習科の教壇に立ち、1921年、大邱中学校の発足とともに大邱中学校教諭となった。

豊田一良は、スポーツマンとして生徒に慕われていたようであるが、惜しい哉1922年夏休み、馬山海水浴場で溺れた生徒を助けようとして殉職した。

亀山利平は、大邱中学校教諭は1921年度の1年のみで、その後京城第二高等普通学校教諭（1922～26年度）・春川高等普通学校教諭（1926～32年度）・大田中学校教諭（1932～34年度）を務めた。1935年から校長となり、江景商業学校長（1935～37年度）・釜山第二商業学校長（1938～40年度）・鏡城中学校長（1941～43年度、以後不明）を歴任した。

話を元に戻して大邱中学校創立当時の教員陣を見ると、校長和田英正の下に教諭6名（上田八一郎・犬塚三郎・松浦益雄・豊田一良・亀山利平・白浜寿夫）が居た。校長和田と教頭上田が広島高師卒だったのである。東京高師卒も豊田・亀山の2名であるが、前述したように彼らの大邱勤務は短期間であり、大邱中学校においては以後も尚志会が圧倒的に優勢であった。

上田八一郎は、1913年に広島高師を出て母校の助教授兼教諭をしていたが、1920年、大邱中学校補習科の開設と同時に朝鮮に赴任し、引き続き大邱中学校教諭として1927年度まで在任した。「高邁なる識見と崇高なる人格偉大なる学殖の持主でその薫化は直接間接大中全卒業生に及ん」⁽²⁵⁾だと

大邱中学校について

いう。

犬塚三郎も、補習科からの大邱中学校教員のひとりである。釜山中学校から大邱の補習科に転入した郡司昇が、次のように証言している。ただし、犬塚と上田の補習科在職時の身分は明らかでない。

補習科の一年生として、入学したときに新任教師として紹介された壇上の先生を見て驚いたのは事であろうに、犬塚先生が新任の先生だった。釜中の生徒寄宿舎の舎監で、時々叱られた先生だったからでもある。⁽²⁶⁾

犬塚三郎は、大邱中学校教諭（1921～25年度）の後忠清北道師範学校教諭となり、教頭として1930年度まで在任した。

ここで大邱中学校における尚志会員の動きを整理しておこう。彼らの氏名、広島高等師範学校卒業年、大邱中学校在任期間は次のとおりである。

和田 英正	1908年	1921～24年度
上田八一郎	1913年	1921～27年度
桧山 四郎	1915年	1922～25年度
七田文一郎	1919年	1922～36年度
原 憲一	1918年	1924～28年度
川崎 文次	1921年	1924～41年度
小田 好長	1929年	1930～38年度
尾形 友助	1907年	1930～43年度
長谷川正男	1931年	1931年度
吉中 武雄	1931年	1932～37年度
児玉 卓之	1930年	1936～39年度
月原 信雄	1933年	1937～39年度（以後不明）
中島 洋一	1935年	1938～39年度（以後不明）
貴志 良橘	不 明	1940～44年度（以後不明）

このように大邱中学校の初期から最末期まで広島高師出身の教員が絶えることはなかったが、とくに尾形校長時代は尚志会色が強かった。「大中では教官は殆んど尾形校長のひき。小山教官を除いては尾形校長が自分みずから探しみつけ折渉して大中教官になった者ばかり」⁽²⁷⁾といわれており、その結果、尚志会員（校長を含む）が、1931～35年度は毎年5名、1936～38年度は毎年6名集中することになった。当時の大邱中学校専任教員は各年16～18名であったから、3～4人にひとりの割合で尚志会員が居たことになる。

上掲リスト中の数名について若干補足しておこう。桧山四郎は、1926年、台北一中教諭として台湾に渡った。その後台湾商工学校教諭となり、1932年頃まで台北に滞在、外地生活としては朝鮮よりも台湾が長かった。

七田文一郎は、大邱中学校教頭（1936年度）から咸興高等女学校長（1937～38年度）となり、その後慶尚南道視学官を務めていたが、1940年5月、急遽釜山中学校長に任命された。前校長の病死に伴う人事であった。運命の皮肉というべきか、七田自身も、釜山中学校長在任2年に満たない1942年4月、職員会議の場で頓死した。

原憲一は、大邱中その後、大邱高女教諭（1929～31年度）を経て再び学窓（広島文理大）に戻った。

川崎文次は、大邱中学校の教頭（1940～41年度）から金泉商業学校の校長（1942～45年度）となり、終戦まで在任した。ちなみに、川崎文次と原憲一はテニスの名手であった。1925年10月6日付の『京城日報』は、第1回慶尚北道教員庭球大会を川崎・原の尚志会コンビが制したことを報じている。

吉中武雄は、1937年当時、大邱中学校専任教員18名中序列12位の平教諭であったが、1938年4月、慶州中学校の新設に際して同校教頭に抜擢された。慶尚北道の中等教育界における大邱中学校の位置付けを窺わせる人事であった。

次に大邱中学校における茗溪会員の氏名、東京高等師範学校卒業年、大邱中学校在任期間を示すと次のとおりである。

亀山 利平	1920年	1921年度
豊田 一良	1918年	1921～22年度
木藤 重徳	1914年	1928～30年度
今村 一郎	1929年	1929～31年度
崔 圭夏	1941年	1941～42年度

このほか東京高師1925年卒の唐沢勝太郎が、1929年度から31年度まで大邱中学校の教壇に立ったが、それはあくまでも兼務であり、本務は大邱高等普通学校教諭（1927～34年度）であった。いずれにせよ大邱中学校における茗溪会員は、尚志会員に比べて数も少なく、木藤校長時代に集中する傾向もなかった。

崔圭夏（チェ・ギョハ）は、創氏改名の結果「梅原圭一」として東京高師を卒業し、直ちに大邱中学校に赴任した。就任に際しては、朝鮮総督府と東京高等師範学校の間で次のようなやりとりがあったという。

梅原先生が、東京高師を御卒業になり、大邱中学に赴任になる際、朝鮮総督府より待ったが掛かり辞令が発令にならなかった様です。『朝鮮籍の為日本人中学校に勤務する事は成らぬ』との事でした。然し、東京高師学校当局より「その様な馬鹿な事を云うなら今后東京高師卒業者は世話をしな

大邱中学校について

い」と強硬な申し入れを朝鮮総督府に行い、亦、尾形校長の尽力もあって就職できた事を感謝しており、亦誇りにして居たと伝えられて居ります。⁽²⁸⁾

崔圭夏（梅原圭一）は、「東京高師を卒業したばかりの一番若い英語教師で、白せき長身、在学中に高分までパスし、またスポーツではバレーボールに乗馬に行くとして可ならざるは無い状態で、またたく間に生徒の信望を集めていた」⁽²⁹⁾が、やはり民族間の壁は厚く、1942年の2学期開始早々、教壇を離れることになった。10月22日、生徒の見送りを受けて大邱から新京へ向かい、満州国官吏となったのである。戦後、韓国政府の重要ポストを歴任し、凶弾に倒れた朴正熙の後継大統領となったことは改めて言うまでもない。

崔圭夏が大邱中学校に赴任した1941年当時、「教師陣の大半は旧帝大出身が占め」⁽³⁰⁾ ていたという。その真偽を確かめるため、ここで帝国大学卒の大邱中学校教員の出身校と在任期間を見ると次のとおりである。

高木 善人	東京帝大	1925～28年度
土田庸治郎	東京帝大	1926～35年度
谷 一郎	京城帝大	1931～38年度（以後不明）
吉峯 宗昌	京城帝大	1932～43年度（以後不明）
谷川 韓生	京城帝大	1934～39年度
岡本 祝	東京帝大	1937～40年度
小林 重光	東京帝大	1940～42年度
酒井 求女	京城帝大	1940～45年度
野田 次男	東京帝大	1941～43年度（以後不明）

上に見るとおり、著者が知りえた限りでは、1941年当時在任していた帝大卒教員は吉峯・小林・酒井・野田の4名（あるいは谷を含めた5名）である。大邱中学校では入学定員増に伴って1940年度から教員が増え、1941年の教員数は21名であったから、「教師陣の大半は旧帝大出身が占め」とは言えないようである。ただ、大半を占めたと思わせるほど、生徒にとって旧帝大出身者の存在が大きかったとは言えるであろう。

上掲リストのうち土田と酒井に関連して少々補足しておきたい。土田庸治郎の大邱中学校在任は、1926年から35年度まで10年に及んだ。土田のほか10年以上勤続者として関根十七司（1923～39年度）、高橋武臣（1924～33年度）、吉田卯（1924～36年度）、荒井富矢（1924～43年度）、布川専太郎（1928～38年度）、荒木徹（1929～43年度、以後不明）、満重正敏（1930～40年度）らが居る。（七田文一郎・川崎文治はすでに言及）

関根十七司は、大邱中学校の教頭（1937～39年度）から会寧高等女学校の校長（1940～44年度）となり、さらに鉄原高等女学校長（1945年度）も歴任した。

高橋武臣は、大邱高等女学校の教頭（1934～38年度）を経て浦項高等女学校長となった（1939～43年度、以後不明）。

一方、大邱中学校長期勤続が他校での校長昇任につながらなかったことが確認されるのが土田と布川である。土田は、総督府官僚に転身し、布川は、羅南中学校に移って1年余の1939年9月8日付で依願免となった。

京城帝国大学卒の教員であった酒井求女（戦後、求馬と改名）は、大邱中学校OB（第1回生）でもあった。清州高等普通学校教諭（1931～39年度）から尾形校長の要請に応じて母校の教員となった酒井は、前述したように母校の幕引きをすることになった。

1940年4月、酒井求女とほぼ同時に大邱中学校教諭となった久保田保行も、大邱中OB（第11回生）であった。当時久保田は東京の体育専門学校を出たばかりで、後輩でもある教え子は、「大中出身で教師というより兄貴のようでもいつも発刺、ビンタ打ちの名手久保田」^(マ)⁽³¹⁾と評している。引き揚げ後、大邱中学校同窓会の発展に尽くした久保田は、「大邱中学は俺の母校だろうが。その同窓会の世話をするのは当たり前だろう。それにもひとつ、俺は体育教師として生徒に時局柄もあり必要以上に厳しく接して来たと思うんだ。だからその罪ほろぼしをしている積りだ」⁽³²⁾と述懐している。

三. 大邱中学校の学校文化

前述したように、第1回生から22回生までの卒業者は計1,710名、これは当該期入学定員総計の74.3%であった。日中戦争勃発後に限ると、たとえば第18回生（1937年入学、42年卒業）は、入学時110名が卒業時には61名（55.5%）、第21回生（1940年入学、45年卒業）は、入学者159名に対して卒業生74名（46.5%）であった。とくに21回生の場合、入学から卒業まで一貫して在籍した者は57名（35.8%）に過ぎない。これらの数字は途中転出者が多かったことを示しており、中には、「江里口先輩は父君江里口中佐の転勤で佐賀に移り大邱中学在籍は入学式一日だけだった」⁽³³⁾という極端な例もあった。

転出のほとんどは軍関係学校等への進学であった。彼らは、2学年修了で陸軍幼年学校へ、3学年修了で海軍飛行予科練習生（予科練）・陸軍少年飛行兵・高等海員養成所などへ、4学年修了で陸軍士官学校・海軍兵学校へと、年齢に応じて中学校を離れ、軍人への道を歩いたのである。京城中学校長（1934～43年度）であった江頭六郎は、「京中時代配属将校が次第に威張り始めたがガンとして独走を許さなかった。登下校はゲートル着用の時代にふだんのズボンの登下校は全朝鮮で京中だけではなかったか。物資不足で靴が手に入り難くなると下駄履き登校も許した。入学式の訓示は『陸士海兵のみが王道に非ず』と教えられた」⁽³⁴⁾というが、大邱中学校の学校文化にはこのようなりベラリズムはなく、ミリタリズム（本稿では学校における「軍事優先主義」の意で用いる）が支配的であった。

一般には、「優秀な健康な仲間軍関係に進んでいった」⁽³⁵⁾といわれており、彼らは「至誠一貫」の校訓を体現すべく進路を選択したものと思われるが、大邱中学校同窓会誌には、次のような率直

な告白も散見される。

51年前の昭和19年4月、私は大中3年を修了し海軍甲種飛行予科練習生14期（1次）として美保海軍航空隊（鳥取県）へ入隊した。大邱中学からは上級生を含め約20人が同期として美保空の隊門をくぐったと思う。

志願の動機は“今はこの戦争に勝つことが先決、将来のことは勝ったあと見直せばよい。いずれは兵隊にならねばならぬ。なるならカッコいい鳴物いりの七ッ釦の予科練だ。死ぬ時は高価な飛行機が棺桶だ”というものだった。⁽³⁶⁾

浅ましい話だが、寮の思い出の半分は腹減りの思い出だ。寮の食事は日を追って悪化、3年の後半は朝はオカユ、昼は素うどんを2杯、夜は大豆カス入りご飯だった。時々夜食にタブーの窓を乗り越えて正門近くにあった支那ソバの「徳盛園」でミソうどん（ジャジャメン）を食べたが、小遣銭にも限度があり余り行けなかった。腹減り解消のため私の場合「予科練」を志願したのも事実である。⁽³⁷⁾

学校生活の中でミリタリズムを育む主たる装置は、定期的に行なわれる軍事教練と随時の野外演習や入営訓練であった。前述したように大邱中学校は、1924年4月、他校に先駆けて現役将校の指揮による教練を始め、同年11月には3年生以上の体験入隊を開始した。この時生徒とともに3日間の兵営生活を経験した和田校長は次のように語っている。

幸にも大邱中学校は歩兵第八十聯隊と隣接して居るため従来非常に便宜を得て居たのである、寄宿舎の窓から毎日々々兵卒の熱烈に教練をしてゐる様子を見て居てさへ不知不識の間精神修養に資する処も少くはないと思ふ特に今秋に至りては実弾射撃に就ての指導、運動会に於ける機関銃隊の応援、引続き今回三日間に亘る営内宿泊等非常に得る処があつたので、此営内宿泊に就ては今茲に生徒の感想録があるからそれをお咄したいと思ふ、大体に於て生徒一同は好感を以て帰つたのである……（中略）……一般に思つたより自由のもので全く予想に反した是ならばモット長くゐたいと云ふものもあり、中には将来軍人となつて国家の安危を双肩に荷つて見たいと云ふ生徒も五六名はあつた⁽³⁸⁾

1926年度からは他の内地人中等学校でも配属将校による教練が実施されるようになったが、大邱中学校の教練は、査閲に際して第80連隊長が直々に査閲官を務め、朝鮮駐留軍の将官連や総督府高官などが多数参観するのを常とした点で他校と異なつた。こうしてすでに1928年頃には、「学校軍事教練に於ては全鮮一の名を以つてゐる大邱公立中学校」⁽³⁹⁾という評価が確立していたのである。

大邱中学校の野外演習に関する記事は当時の新聞にしばしば登場するが、その代表として1929年7月の模擬戦の様相を紹介しておこう。

大邱中学校では軍事教練実施三周年を迎えた七月一日を記念すべく大邱青年訓練所生と聯合して歩兵八十聯隊の後援を得て一日午後七時から二日午前七時まで大邱の市街を中心に達城公園新川岸北里研究所付近星川街道等で一大模擬戦を挙行したが同夜は前後三回にわたる豪雨の中にも拘らず全員一名の落伍者なく志気大いにあがった演習は午前七時終了、教官林田大尉に引率された五百の健児および訓練所生一同大邱神社に参拝ラツパ隊を先登に大邱市街を行進中学校に入り校庭で木藤校長、山崎府尹、井出中佐の検閲を受け分列式を行つて午前八時解散した⁽⁴⁰⁾

こうして鍛えられた中学生たちは、ある大邱高等女学校生の目に「兵隊さながらだった」⁽⁴¹⁾と映っている。

ミリタリズムは、運動会や臨海学校にも及んだ。満州事変後の運動会では、トラックの途中に置いてあるゲートル・上着・帽子・帯剣などを拾って身に着け、背囊を背負い銃を持ってゴールへ駆け込む「武装競走」が行なわれるようになった。また、開校初期以来、希望者に対し大邱中学校教員の指導の下に実施されていた臨海学校は、太平洋戦争期になると義務的な「海洋訓練」に変わり、「精悍な海軍下士官の指導によるカッター漕艇」⁽⁴²⁾が課されるようになったのである。

そもそも大邱中学校は、生徒の身なりからしてミリタリールックであった。「黒の小倉（夏は霜降）の制服に制帽、黒い短靴にまきゲートル、ズックの鞆を肩から下げて」⁽⁴³⁾というのが、開校時（1921年）の1・2回生のいでたちであった。その後、1934年に黒の小倉が国防色の折り襟服に、1935年頃にカバンが背囊に変わったが、ゲートルは不変であった。1939（昭和14）年、大邱中学校4年修了で福岡高校に進学した占部良彦が、内地との違いを次のように記している。

昭和十四年に私は大邱中学から旧制の福岡高校に進んだ。ここで、張りつめた戦時態勢下の植民地・朝鮮と、のんきな日本内地の生活との落差に驚いた。私は中学四年間、毎日編み上げ靴にゲートルをつけ、背囊のようなかばんを背負って登校、校外でも軍隊式の敬礼をさせられていた。ところが、内地の中学生たちは吊りかばんを肩にひっかけ、ゲタばきで登校しているではないか。⁽⁴⁴⁾

このような大邱中学校の学校文化の一面を、大邱中出身（第21回）の作家小林勝と、1942年の1学期大邱中学校に在学した芥川賞作家日野啓三は、作品の中で次のように描いている。

慶尚北道にただ一つある日本人中学校は粗暴な校風で腕力が生徒間のモラルであった。上級生の下級生に対する暴力沙汰を学校は黙認していた。それは同じクラスの中でも同様であった。学問の出来のよい者でも腕力に自信のない者はびくびくして過ごし癡猛で薄汚れた者達がやくざまがいの猫背でのし歩いていた。⁽⁴⁵⁾

翌春、近くの地方都市の中学校に進んで、寄宿舍に入ったが、木造二階建ての陰気な感じの寄宿舍は、学校の構内の端にあって狭い道路ひとつ隔てて軍隊の兵営と隣り合っている。兵営からは訓

練の号令や悲しげな消灯ラッパの音がいつも聞こえてくる。そして中学校の寄宿舎も、軍隊の兵営生活の滑稽な小型版だ。⁽⁴⁶⁾

これらはいずれも小説の一節であるが、小林勝・日野啓三の経歴からしてあながち誇張とばかりは言えないであろう。

以上、ミリタリズムに焦点を当てて大邱中学校の学校文化を見てきたが、大邱中学校には、慶尚北道随一の進学校というもうひとつの顔があった。卒業生の進路に関する最も古い手持ち資料は、次の第3回生（1927年3月）のものである。

大邱中学では七日卒業式を挙げるが卒業生五十六名中殆ど上級の学校にこゝろざす者多く家事従事等僅七名の少数を示してゐるがその内容左の如し

▲大学予科八名▲高等学校九名▲高等商業八名▲高等工業九名▲医専三名▲海軍兵学校一名▲陸軍士官学校一名▲外国語学校二名▲水産講習所一名▲満洲教育専門二名▲京城師範演習科二名▲通信官吏伝習所一名▲薬学校一名▲飛行学校一名⁽⁴⁷⁾

これらの数値から、開校初期から大邱中学校が、京城中には及ばないまでも平壤中・龍山中・釜山中には引けをとらない進学校だったことがわかる。卒業後の進路として軍関係学校が少ないのは、言うまでもなく軍学校進学者が、すでに途中で中学校を離れていたからである。

日中～太平洋戦争期には、地元の大邱医学専門学校への進学者が急増した。次は、1939（昭和14）年入学、1944（昭和19）年卒業の第20回生の述懐である。

私どもは昭和14年に入学し、19年に卒業しました。入学した時は、すでに支那事変は泥沼化し始め、政局複雑怪奇、遂に大東亜戦争に突入し、緒戦の快勝も束の間、戦局日々に悪化し、卒業時には敗色濃厚となっていました。これが挽回に憂国の至情に燃えて、軍関係の諸学校に進学する者約1/3。交通難・食料難・住宅難等から大邱医専に進学する者約1/3でありました。今でも20回生の1/3は医者であります。

これは、誠に異常であります。異常な時代に、しかも植民地という特殊な地に育ったのが我々でした。⁽⁴⁸⁾

進学校としての大邱中学校は、旧制中学校の例に漏れず文武両道を目指した。とくに剣道は重視され、開校時から必修科目であった。しかし、対外的には、剣道部が1935年に全鮮中等学校剣道大会で優勝したのが最高の戦績であった。

野球部は、1928・29年の第1・2回南鮮中等学校選抜野球大会を連覇したのが華で（とは言え出場校は第1回3校、第2回4校）、他にめぼしい戦果はなかった。甲子園の予選では「出ると負けの大中」⁽⁴⁹⁾と、味方からも嘲られたものである。全国中等学校優勝野球大会は、1921年の第7回大会か

ら朝鮮予選が始まり、大邱中学校は1926年から35年まで10回出場したが、1933年の2回戦突破が最高で、あとは初戦敗退4回、2回戦敗退5回であった。

このように野球部の成績が振るわなかったのは、学校側が、選手の野球の力量よりも学業成績を重視したからである。甲子園大会朝鮮予選前の新聞には、例年、大邱中チームに対する次のような下馬評が見られた。

このチームの特記すべき事は選手中に成績5番以上の優等生5名を擁し、成績優秀を選手の条件としている事で、それだけに胸のすくような頭の良さと学生らしいキビキビした温良さを多分に有していて、こんなに気持ちのいいチームは鮮内では珍しいといわれている。(1929年)⁽⁵⁰⁾

同校は学科重視主義をとり、ナインは全部10番以内の秀才を集めており、頭脳明晰で進境著しく2年後の黄金時代の活躍こそ見物であろう。(1930年)⁽⁵¹⁾

学校側が成績不良者は選手にしないという方針をとっている為、自然とチームの働きの上に現われ、上品でのびのびした態度の中にもヘッドワークの閃きを見せる。(1932年)⁽⁵²⁾

野球部の不振に見切りをつけたのか、学校側は1931年9月、「第二学期のプラン」として「一般競技においては商業師範農林等の体格におされるため運動としては特に剣道部、柔道部、教練に力を集注する」⁽⁵³⁾ ことを打ち出している。

情操教育の一環として大邱中学校では花作りが奨励されたことも紹介しておきたい。次の引用は、1929年5月と1936年10月の新聞報道である。

大邱中学校では情操教育に資するため校庭に花壇と泉水を築造中である泉水は本年卒業した生徒が寄附した記念金と在校生の労力奉仕からなりたつたもので朝鮮半島をかたどつてある⁽⁵⁴⁾

植物に対する愛護心を養ひ且は情操向上の糧ともすべく大邱中学では三年前から一年生全部に苗を与へ一人一鉢づつの菊花を作らせてあるが今年も見事に咲き揃つたので来月四日父兄会を開いて生徒苦心の傑作を展覧に供することとなつた、なほ今年は初試みとして作品全部を先生方が審査し一等から十等までを選出して賞状を与える筈なので生徒は目下腕に縫りをかけて手入中である⁽⁵⁵⁾

大邱中学校における教科教育中、とくに英語に関して言及しておこう。川崎文次は、1981年、かつての同僚荒井富矢への弔辞の中で大邱中学校の英語教育を次のように回想している。

大邱中学校の英語教科は開校当初から後年東京で英語教育界の第一任者と目された上田八一郎^(ママ)大先輩を始めとして、七田文一郎先生、荒井先生の後任梅原先生（後の韓国大統領崔圭夏）達の如

大邱中学校について

き実力陣のスタッフで充実したものであった。当時生徒達は授業合間の十分休みにも英語の本を持ち出して勉強する風景が見られ、大邱中学校を卒業して上級学校に進学する者が、異口同音に英語の実力については他校出身者のそれに比して著しく優れ余裕があったと云っていたものである。それほど大邱中学校の語学力は素晴しかったものである。⁽⁵⁶⁾

このような英語教育のレベルもさることながら、より重要なのは、敵性用語として英語の使用が禁止された太平洋戦争末期においても大邱中学校の英語教育は継続されたということである。22回生と25回生が、次のように証言している。

四年生の二学期だったと記憶します。つまり、昭和19年（1944年）9月の頃、多分まだ上衣は着ていなかったように思います。勤労働員の合間の英語の授業でした。世間では敵性横文字は使えませんが、学校では英語の授業は続いておりました。⁽⁵⁷⁾

憧れの大邱中学は、昭和19～20年の1年4ヶ月の短期間、そのうち勤労働員に過半の時間が割かれたが、英語、数学、物理、国語、漢文、軍事教練と、文武両道に、質実剛健の気風に触れ、戦後の荒波を生き抜く体力と気力を与えられた。特に英語の授業は、米国帰りの老教師から[th], [l], [r]の日本語との違いを教えられたが（以下略）⁽⁵⁸⁾

大邱中学校の修学旅行は、学校創立の翌年（1922年）から始まった。ただし、この時は単発の企画で、上野公園での平和博覧会参観をメインに大阪～京都～奈良～伊勢～東京～日光を訪れた。

1923年に3年生の慶州旅行、1924年には4年生の満州旅行が開始され、以後、3年時に慶州、4年時に満州へという体制が確立した。

4年生の満州旅行が内地旅行に変わった時期は定かでないが、1936年4月24日付の『京城日報』には、「大邱中学校旅行団四年生一行は廿一日出発したが神戸、大阪、奈良、京都、名古屋、東京、日光を見学の上別府経由で来月二日帰校の予定」という記事がある。

内地への修学旅行は、太平洋戦争の勃発によって不可能となり、1942年、再び満州行きに切り換えられたが、これまた1年で中止された。

このように大邱中学校の修学旅行は変転を重ねたが、いずれにせよ修学旅行が他校におけるほど重視された形跡はない。進学校で、しかも途中転出者が多いという大邱中学校の性格の然らしめるところであったろう。

本節の最後に大邱中学校の朝鮮人生徒について見ておこう。大邱中の1923年度の入学「志願者は二百三十三名あり内五十七名は鮮人であつた」⁽⁵⁹⁾が、実際に入学できた朝鮮人は4名であった。1939年の入学者中「内鮮一体政策実現のモデル役を微力ながら成し遂げた一人ぼっちの留学生であった」という咸泰英は、入試の状況を次のように記している。

入学試験場になっている50席余りの教室に入ってみて、ほかの教室とは異なり席が半分位空いているのに気がついた。文部省発行の教科書と内容が違う朝鮮総督府のもので習った受験生は別に集めて教室を配当したために、約20名位の朝鮮人生徒と田舎の小学校で総督府のものを利用した内地出身の生徒がごく少数いたとの事だった。

その中で記憶に残るひとりが北畠君であり、全入学生の中で朝鮮出身は私一人だけであった。⁽⁶⁰⁾

3・1独立運動後に設立された大邱中学校には、内鮮一体政策の一環として朝鮮人の入学も認められていた。しかし、朝鮮人入学者は、多くの志願者があったにも拘らずごく限られていた。朝鮮人生徒の中には、小学校から日本人とともに学んだ者もいた。たとえば「大邱の鳳山町小学校と大邱中学校で、少年時代の一時期を共に過し友情を育んだ韓国の学友達」⁽⁶¹⁾がいたのである。もうひとつのルートは、上の咸泰英の回顧談にあるように普通学校→中学校で、彼らには小学校卒業生とは別の入試が課された。

1940年の入学定員増の後、朝鮮人入学者数も微増し、各年6～7名となった。しかし、卒業生は計49名、大邱中学校全卒業生の2.9%に過ぎない。

彼ら朝鮮人生徒にはいくつかの特徴があった。ひとつは、日本人以上の激しい競争を経て入学しただけに成績優秀だったことである。中には、日本人を差し置いて卒業生総代を務めた者もいた。第6回生の平光次が、1年後輩の姜永昌の思い出を次のように語っている。

姜君は短距離の選手だっただけでなく、なかなかの秀才で、第七回生卒業式に、成績最優秀でも朝鮮人である彼に生徒代表としての答辞を読ませることには、異議あり、と職員会議でもめたのを、時の配属将校の宇部先生がカバーして、彼が答辞を読むことに決定された、ということ、私はつい分後年になって聞いた。⁽⁶²⁾

もうひとつの特徴は、親子・兄弟など血縁関係が目につくことである。1988年、盧泰愚政権の保健社会部長官（厚生大臣）となった韓国人「大邱中学校卒業生のMVP」⁽⁶³⁾文太俊（第21回生）は、第1回生文日寿の息子である。また第3回生金文輯・14回生金文輝・19回生金文翰は兄弟である。

植民地朝鮮の内地人学校に学んだマイノリティーグループである彼らは、日本人以上に日本人たろうとしたこともあった。第12回生崔鳴夏は、航空士官となり、「靖国神社の一角に崔鳴夏としてではなく武山大尉として祀られている」。⁽⁶⁴⁾

敗戦後、親日派と目された彼らは、それぞれに苦難を味わった。極端な例として、第22回生金教泰の「一家は終戦直後、親日家を理由に悲惨な最期を遂げたという」⁽⁶⁵⁾当時の在校生10名も、「反日感情逆巻く氷海に投げ出され」⁽⁶⁶⁾、韓国人学校への編入に苦勞したという。

おわりに

1945年9月、米軍がソウルに進駐、米軍政がスタートした。国民学校が9月24日、中等学校が10月1日に再開校され、この時、日本人学校であった大邱中学校（たいきゅうちゅうがっこう）は、韓国人学校としての大邱中学校（テグチュンハッキョ）に生まれ変わった。ただし、環境が一変しても見た目の校名は変わらなかった稀有な例である。

1950年6月、朝鮮戦争が勃発、1945年10月以来80連隊跡に駐留していた米軍は、大邱中学校も海兵隊の兵舎として接収した。大邱中学校はやむなく、道を隔てた新敷地に移転した。これが現在の校地・校舎である。

大邱中学校は、「ドルメンのある学校」として有名であった。このドルメンは、1927年、「本府（朝鮮総督府—稲葉註）の小泉囑託が来邱発掘の結果石槍を初め陶器の破片を掘出し即ち完全なる形をなせるドルメンで考古学上参考とすべきもので本府において考古資料として永久に保存すべくこれを買上げ」⁽⁶⁷⁾ たものであったが、朝鮮戦争中に米軍によって取り潰され、跡形もなくなった。

1993年、旧本校舎が焼失、もはやかつての大邱中学校を偲ぶよすがはほとんどない。しかし、1971年夏に大邱中学校野球部が親善試合のため九州を訪れたのを契機に関係者有志の日韓交流が始まり、1985年には新旧の同窓会同士の間で連携が発展した。爾来、活発な交流が続いているが、それは、「国籍は変えられるが学籍は変えられない」⁽⁶⁸⁾ という認識の下、韓国側が旧大邱中学校OBを先輩として遇してくれているからである。

註

- (1) 『大邱中学校九州同窓会会誌 たいちゅう』 第26号 2005年 p.35
- (2) 『京城日報』 1925年 2月14日付
- (3) 『鳳山町公立尋常小学校同窓会誌 育鳳』 第4号 1991年 p.4
- (4) 『たいちゅう』 第22号 2001年 p.40
- (5) 『京城日報』 1920年 2月26日付
- (6) 『たいちゅう』 第3号 1980年 p.10
- (7) 『京城日報』 1920年10月28日付
- (8) 同上 1924年 1月20日付
- (9) 同上 1924年10月 3日付
- (10) 『たいちゅう』 第3号 p.3
- (11) 同上 第14号 1993年 p.7
- (12) 『京城日報』 1931年 6月30日付
- (13) 同上 1934年 2月 6日付
- (14) 『たいちゅう』 第21号 2000年 p.18
- (15) 同上 第25号 2004年 p.19
- (16) 同上 第15号 1994年 p.3
- (17) 阿部薫編 『朝鮮功労者銘鑑』 民衆時論社 1935年 p.812
- (18) 『京城日報』 1925年 4月27日付
- (19) 『たいちゅう』 第22号 p.2
- (20) 『京城日報』 1932年 3月27日付
- (21) 『たいちゅう』 第22号 p.2
- (22) 同上 第6号 1983年 p.12
- (23) 『育鳳』 第12号 1994年 p.14
- (24) 『たいちゅう』 第5号 1982年 p.3
- (25) 同上 第1号 1978年 p.3
- (26) 同上 第9号 1988年 p.21
- (27) 『育鳳』 第12号 p.14
- (28) 『たいちゅう』 第10号 1989年 p.11
- (29) 同上 第9号 p.17
- (30) 同上 第23号 2002年 p.17
- (31) 同上 第3号 p.4
- (32) 同上 第23号 p.3
- (33) 同上 第20号 1999年 p.58

大邱中学校について

- (34) 『育鳳』 第20号 1998年 p.9
- (35) 『沃野50年誌』 大邱中学校第22回生沃野会 1996年 p.23
- (36) 同上 p.31
- (37) 『沃野55年記念誌』 2000年 p.18
- (38) 『京城日報』 1924年11月9日付
- (39) 同上 1929年1月10日付
- (40) 同上 1929年7月4日付
- (41) 森崎和江 『慶州は母の呼び声—わが原郷』 新潮社 1984年 p.146
- (42) 『たいちゅう』 第25号 p.22
- (43) 同上 第5号 p.3
- (44) 同上 第7号 1984年 p.5
- (45) 同上 第3号 p.4
- (46) 同上 第21号 p.17
- (47) 『京城日報』 1927年3月3日付
- (48) 『はたちの会』 大邱公立中学校第20回生 2001年 p.5
- (49) 『たいちゅう』 第20号 p.3
- (50) 西脇良朋 『朝鮮中等学校野球史』 私家本 2000年 p.115
- (51) 同上 p.150
- (52) 同上 p.273
- (53) 『京城日報』 1931年9月3日付
- (54) 同上 1929年5月8日付
- (55) 同上 1936年10月30日付
- (56) 『たいちゅう』 第5号 p.2
- (57) 『沃野55年記念誌』 p.42
- (58) 『たいちゅう』 第25号 p.22
- (59) 『京城日報』 1924年2月23日付
- (60) 『はたちの会』 p.28
- (61) 『たいちゅう』 第25号 p.9
- (62) 同上 第10号 p.15
- (63) 同上 第23号 p.44
- (64) 同上 同上 p.41
- (65) 同上 第15号 p.16
- (66) 同上 第23号 p.44
- (67) 『京城日報』 1928年8月2日付
- (68) 『たいちゅう』 第15号 p.20

**The Taikyû Middle School:
A “Naichijin” School in Colonial Korea**

Tsugio INABA

Located in Taikyû (K. Taegu), the fourth largest city in colonial Korea following Keijô (K. Kyôngsông: present-day Seoul), Heijô (K. Pyôngyang), and Fuzan (K. Pusan), Taikyû Middle School was established as the sixth middle school for *naichijin* (Japanese living in colonial territories) in colonial Korea. The Eightieth Regiment being placed in Taikyû, a middle school was opened in Taiden (K. Taejôn) before Taikyû.

Taikyû Middle School was closely related with the army from its birth, and its militaristic orientation was obvious in its education and student life. The following facts demonstrate this profile of Taikyû Middle School: 1) it was the first middle school to introduce military drill by officers in active service in 1924 (a practice which started in Japan proper in 1925, followed by other schools in colonial Korean in 1926) and remained as the model school for military drill; 2) with a large number of its student body transferring to military academies, the number of students who graduated after completing the five-year course was not large. Another characteristic of Taikyû Middle School was that its faculty was mostly graduates of Hiroshima Higher Normal School.

After the liberation of Korea, Taikyû Middle School was reborn as Taegu Middle School, using the Chinese characters in the school name. The alumni of Taegu Middle School treat Taikyû Middle School graduates as their seniors, a rare case of human ties produced from the colonial rule.